様式(細則 5-2)

平成 31 年 3 月29日

浜田市議会議長　　川神　裕司　様

議員名　川 上　幾 雄　㊞

調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため視察を実施したので、その結果を報告します。

記

1．期　　間　　平成 31 年 3 月 18 日　(月) ～平成 31 年 3 月 20 日　(水)

2．視察・研修内容

（1）場所　宮崎県日南市　市役所
　　内容　空き店舗対策事業所について

（2）場所　宮崎県日南市飫肥町
　　内容　飫肥食べ歩き町歩き事業について

（3）場所　熊本県球磨郡あさぎり町「リュウキンカの郷」
　　内容　空家をリノベーションし、広域連携の法人で稼ぐ
　　地域コミュニティービジネスの取組について

（4）場所　熊本県人吉市　農家レストラン「ひまわり亭」
　　内容　農村レストランの取組について

3．参加者　　西田清久、川上幾雄、道下文男、上野　茂、笹田　卓

4．調査経費　　１９６、３８４円／５人＝３９，２７７円
　　（経費内訳　別紙のとおり　　）

浜田市議会 受付 31.4.-2

5．調査研究活動の概要

（1）空き店舗対策事業について

（内容）

日南市は「創客創人」と銘うって「油津商店街の動きとIT企業進出への取組」をパワーポイントで説明された。そして、この「創客創人」の副テーマは「油津商店街は再生したのか？」とある。

まるで謎かけのようであったが、最後まで説明を聞くと「なるほど！」とうなずけた。

油津商店街の昭和４０年代は、宮崎県南地区最大の商店街でありアケード街は客が溢れるようであったが、その後１０年ほどで空き店舗や空き地の増加、歩行者通行量や小売販売額の減少などの衰退が見られ、燐市などへの買い物客の流出などによる厳しい環境となった。そして、市民から「商店街」という存在が薄れてしまった。

このような商店街を再生しようと、平成２５年度に日南市長（崎田恭平氏３９歳）は、*公募の中から選んだ民間人を登用*し、公募に示された４年計画で事業を進められた。

３３３人の中から選ばれたテナントミックスサポートマネージャー

木藤亮太氏の示した内容

内需の循環がミッション

日南市内の消費循環と、そのための魅力ある商店街の復活を目指す。

…目標達成指標…

○空き店舗活用の検討、業種バランスなどの配置計画の策定及び事業者の誘致、並びに適正な配置

（目標：**４ヶ年で２０店舗**　誘致）

○タウンマネージメント体制の整備

○賑わい創出に係るソフト事業等のサポート及び協同体制の構築

○その他中心市街地活性化に資する新規事業の提案及び実施

○商店街等の既存店舗の経営改革等に係るリニューアル指導・支援及び商店主、地権者との信頼関係の構築

１年目

・現状把握・信頼関係づくり（ミーティングやコミュニケーション）

・まちの応援団づくり（商店街住民、市民、市内中高生、在京の日南出身者）

・他にはない公民連携を目指す

・市民の声…店舗誘致は０件、２０店舗なんて無理！

２年目

・動きはじめる　商店街１号店舗目　ABURATU SOFFEE オープン
・商店街２号店舗目　二代目湯浅豆腐店オープン
・１４の団体や企業が参加　みんなでつくる「土曜夜市」の復活
・２年目　平成２６年度　店舗誘致は２件　２０店舗はやっぱり無理！

３年目

・まちが変わった！　店主らの気持ちの変化　⇒商店街の人々に火が着いた
・修理屋さんのいるまち油津商店街→リブランディング
・多世代交流モール　油津 Yotten
・東京から IT 企業の進出
・市民の声…店舗誘致は１５件　IT 企業が３社　２０店舗誘致できるのでは？

４年目

・持続していく仕組み！　体制を整える！
・商店街で新たなチャレンジ　　大学生によるゲストハウスオープン
・子育て・保育支援　　若者のニーズに答えた
　　子育て支援センター ことこと　小規模保育施設
・新規店舗誘致実績２９店舗（H２９．３月末）
・市民の声…店舗誘致は２９件！　IT 企業も１０社！　日南でもできるんだ！
・強いリーダーシップと行動力により、衰退した商店街が
**　若者がチャレンジする新しいまちに生まれ変わった。**

・安倍総理スピーチ　H29. 12. 15 共同通信加盟社編成局長協調会議
　油津商店街へ行けば、やりたいことが実現する。そういう何か、わくわくするような空気感が、今、商店街再生の大きな原動力になっている。こうしたわくわく感こそが、地方再生の鍵であると考えている。

油津商店街は再生したのか

・商店街の新たな機能を中心に
　（　多世代交流施設　ゲストハウス　子育て支援施設　IT 企業オフィス　）
　多様なコミュニティが生まれた

⇒　油津商店街？

（考察）

確かに商店街は利用され始めているがこれで「油津商店街は再生したのか？」。いや、再生ではなく新しい街が生まれようとしている！。

この思いは、机上後現地での説明を受け一段と強くなった。集まる場所、イベントをする場所へとテナントが若者向きになりつつあり、元の商店街が広場としての機能を持った新しい街へと変遷する様子が見受けられ、若者と旧商店街の人、そして行政が知恵を出し合い、そして民間人の発想を生かしたまちづくりを進めようとる様子がうかがえる。「昔のような賑わいを求め、まちを再生しよう。」ではなく、世の中の変化を先取りし、「新しいまちづくり」を求められているのではなかろうか。

私たちの住んでいる浜田市は少子高齢化の波の中にさらされている。この現象から逃げることは困難であり、しかたないとの思いは強いがどこかに解決策はある。幸いにも浜田市は東西に長く日本海と中国山地が迫り、環境が悪いのではなく、都市部の住民にとってはきっと「素晴らしい環境」であろう。海の良さ、山地の良さ、中間部の良さ、魚産物、林産物、農産物、どれをとっても自慢できるものばかりである。今回の視察で感じたことは、この環境をどのように生かすかが私たちのなすべきことであり、これこそ地域再生、新しいまちづくりである。

（２）飫肥食べ歩き町歩き事業について

（内容）

宮崎県は、昭和３０年代半ばから昭和４０年代かけては、新婚旅行のメッカと呼ばれるほど観光に特化した地域であった。その後観光の変化により客数の減少や観光の業態が低価格し、飫肥地域では飫肥城内の観光が中心で、商店街まで足を運ぶ観光客はほとんどいなく「駆け足観光」が主流で飫肥に留まる時間は１時間未満が多かった。このような傾向が続き、そして空き家と少子高齢化が進行し飫肥は急激に衰退してしまい、新たな魅力あるまちづくりが喫緊の課題となり、これが「飫肥食べ歩き街歩き事業」に結びついている。

飫肥城下町保存会が管理する７由緒施設のうち、３施設が本町通り及びその周辺にあることから、その入館増を図ることが大きな課題として挙げられ、飫肥を訪れる観光客を、城下町の風情を楽しみながらまた由緒施設を見学しながら、飫肥城内から城下の本町通りまで誘導し、地元の昔ながらのおいしい食べ物や手作りの商品等と引き換える「あゆみちゃんマップ」が生まれた。そして、ゆっくりと楽しんでもらえる仕組みを創った。

「あゆみちゃんマップ」は、平成２１年に販売を開始し現在９年を経過している。この間、内容のリニュアルを加えながら平成３０年７月１３日には「２万５千人達成記念イベント」を行われている。

参加店舗数は１６から始まり、平成２６年には４２店舗となり、現在は新規店舗（５店舗）を加えた４４店舗が参加している。

この事業は、財団法人飫肥城下町保存会を設立され２期運営され、平成２５年４月には一般財団法人へ移行され、より運営に力を入れている。

＜現状と課題＞については

① 入館者増の取り組み
- 新規事業の取り組み
- インバウンド、移住定住、種瀬作との連携
- 東京五輪・パラリンピック

② 新たな収益事業の構築
- 観光駐車場の有料化
- 場内（大手門内）有料化

③ 飫肥のまちづくりを担う
- マップによる飫肥のまちの回遊性の推進性と商店街の活性化
- 歴史的遺産を活かしたまちづくり
- まちなみ再生コーディネーター
- 地域おこし協力隊
- 空き家の活用（古民家の再生）

（考察）

城下町保存会が自主事業として始められた「飫肥たべあるき・町あるき事業」は着実に発展しており、財団法人から一般財団化して、新たな収益事業により確実な経営と問題解決への新たな一歩を踏み出し、「飫肥のまちづくり」を担うような仕組み作りが目の前に見えている。

飫肥は、これまで管理されてきた「飫肥城」の石垣や、城下町の街並みや家屋が歴史を踏まえ悠然と佇んでいることが最大の武器であろう。中でも、石積みは変化に富んでおり、これだけでも観察に好きな人は時間を取られそうである。くわえて、城下町の佇まいは歴史を経ても大きく変化しておらず悠久の時間を与えてくれるようである。そして、このような歴史と食を組み合わせ、なおかつ観光客の手に取りそうな地域性のある土産を提供することを、一枚のマップに仕上げていることは驚嘆に値する。マップでは空き家の活用、住民の自主的参加が町全体のマップ化に生かされているように感じる。

やはり、全体としての取り組みには核となるものが必要であり、この点が重要と思わされた。また、その地域の歴史は捨て去るものではなく、生かしてこそ地域が存続することにつながる。浜田市も「開府４００年」を機会として、歴史を見直し地域の一体化が図れる方策を探るべきであり、開府に至る歴史資料をしっかり収集整理し、その中にこそ隠された方策があると感じる。例として、先般の一般質問で提案した「城跡を活用した狼煙リレー」も一考に値すると思う。

（３）　空家をリノベーションし、
広域連携の法人で稼ぐ地域コミュニティービジネスの取組について

（内容）

球磨郡あさぎり町の古民家を再利用した宿泊型の研修所、「食・農・人総合研究所リュウキンカの郷」において、当研究所主宰 本田　節氏らとの対話形式で「空家をリノベーションし、広域連携の法人で稼ぐ地域コミュニティービジネスの取組について」説明を受け討議した。

人吉球磨グリーンツーリズム推進協議会（人吉市ほか４町５村）

・地域内の女性が中心となって、地元産の農産物を使った郷土料理を農家民宿や農家レストランで提供するとともに、農家独自で開発した農産加工品を地域へ訪れる旅行者等へ販売。
・持続可能な地域実現へ向けて、若手人材の育成及びコーディネート等を目的に協議会の法人化を行うとともに、泊食分離等を踏まえた地域一体型経営を目指す。

○協議会の概要

・人吉球磨１０市町村の広域連携により、地域の豊かな資源を生かしたグリーンツーリズムを推進することで、都市と農山村交流を図り、活力ある持続可能な地域を実現するために協議会を結成。
・持続可能な地域の実現に向けて、一般法人化。

○農家の取り組み体制

・地域内の農産物を地域外からの多くの旅行者に知ってもらうため、パッケージの工夫や少量での販売を実施。
・独自の農産物の加工品に取組み、積極的に販売。（合鴨米、漆黒米、えごま油）

○宿泊

・人吉球磨１０市町村内で簡易宿泊所の営業許可を受けている農家民宿１９軒で宿泊を受入し、「本物のおもてなし」として、地元産の農産物を使用した郷土料理を提供。
・主な宿泊者は、個人旅行者であり、H２９年の延べ宿泊者数は１，２３８人泊

○食を中心とした取り組み

・心、身体、地域を育む健康な食事で、都市と農村をつなぐ「命の食」を実践。また、地域住民や農家実践者を対象に定期的に料理・食文化研修を実施。

JR 九州観光列車(SL 人吉)で提供する弁当を手掛け、観光と連携。

○誘客コンテンツ

・日本棚田百選に選ばれた「松谷棚田」や世界観街施設遺産の「幸野溝、百太郎溝水路群」を活かしたフットパス等を提供。

・現在、「相良三十三観音めぐり」、「球磨焼酎蔵めぐり」等、日本遺産を活用した体験プログラムと滞在プランを開発中。
・有限会社ひまわり亭では、月替わりの郷土料理を提供。

討議の覚書
※リノベーションの原点は地域の施設に命を与え、それを地域活性の原点にする。地域資源を生かす、すなわち人物の再生かもしれない。地域再生の一助として古民家を、そしてそこへフットパスを取り込む。
※フットパス…地域をつなぐ新しいルール、地域を見直す機会として活用。
※まちづくりが総て賑わいづくりではない、個々の覚悟が表れていることが大事でここからがスタート。
※提案型の地域協力隊。…ふるさと回帰かも
※地域のこれまでを再考することを含めて世代を超えたミュージアム。
※歴史を振り返り、「なぜここに、なぜこれが、なぜこうして」今に繋がっているかを考える。
※互助の精神、自立心、慈愛の心を生み出すプライド。
※多様な切り口でまちづくり進める。…福祉、防災、建築、司法書士、その他の力を結集して。
※情報はITで広く集まるが、実現場での実行を得ない情報は生きたとは言えない。
※まちづくりは空間の中での自由な会話から生まれる。
※自分の才能や地資金は限界がある。だから多様な仲間が必要。
※常に進化して結果を出すことが他者への幸せを与えることができる。
※感動できる自分を取り戻す。…ツーリズムの原点。
※子は親の背中を見て育つと言うが、見る環境、見せる環境を自然の中で作ることが大事。
※人は学びと、学び直しで造られる。
※重ねた年齢は、その人の生きざまである。

(考察)
約5時間に及ぶ説明討議で前記の覚書を残した。これらのすべてが心に響くものであったが、やはり地域の歴史の中にこそこれからがあり、そしてそれを紡ぐのはそこに育った人であり環境であると再認識した。
まちづくりは、そこに育った人々と生活している人々、そしてそれを外から支援できる人々の合わせ技が大事であり、浜田市のまちづくり活動にこの三者が集まり話し合うことが重要である。そして、活動の中にフットパス（小さな小道）を加え、地域を見直す機会とすることを勧めたい。
そして、主宰である　本田　節　氏の「エコノミーとエコロジーが調和したバランスある地域づくりを」が私たちの今後の課題であり、次の段階へつながる。

（4）農村レストランの取組について

（内容）

平成元年、主宰である 本田　節　氏は「地域づくり」という名の元に、各地に出かけて研修や交流を重ねていた。当時の熊本県は日本一運動という地域おこしが盛んで、全県下に３００程度の地域づくり団体が誕生した時期でもあった。そのような時、本田氏は病気で入退院繰り返しながら闘病生活を強いられた。そうした中「２度とない人生！後悔のないない生き方、そして自分の生きざまを子供たちに残してあげることが私の生きた証ではないか」と思い、あらゆる苦しい治療を乗り越え元気を取り戻した。それをきっかけとして始めたのが地域づくり団体「ひまわりグループ」。

５０代から７０代の年代の違う地域の主婦たちと、一人暮らしの高齢者への声掛けを兼ねての弁当宅配のボランティアを始めた。そんな仲間たちで「食・農・命」をテーマに活動していくうちに、「生涯現役でもっと生きがいや居場所づくりや、地域の役に立ちたい！」という話になり、何ができるかと色々考慮した結果、「農家レストランをやりたい！」と結果、「郷土の家庭料理　ひまわり亭」が誕生した。

ひまわり亭の雇用は「待ってました、定年！６０歳新入社員、生涯現役！」をモットーに高齢者雇用と子育て支援型としている。人が年を重ねるということは、経験、知恵、技、感性が豊かになることで、その人こそ資源という、高齢化社会を逆手に捉えたコミュニティビジネスにつながっている。

現在の業務内容は、「地産地消による家庭料理の提供」、「食を通じた地元の情報発信」、「地元の旬の食材を使った食文化の創造と伝承」、「食や命、農をテーマとした各種イベントの開催」、「グリーンツーリズムの推進」、「食育活動の推進」で今後も、この６つの柱を中心として食資源を生かしたまちづくり、人づくり、元気づくりの拠点としてネットワークを広げていきたいと思う。

そして、これからは、これまでの地域づくりなどの活動をより再活性化し、持続可能な事業展開のために、エコノミー（経済の振興活性化）とエコロジー（環境保全）が共生し・調和したバランスある地域づくりを目指していきたい。と主宰は記されるとともにお話の中に述べられた。

実際に「ひまわり亭」で昼食をいただいたところ、私よりお若い方は１名だけ、他はすべて高齢者でありながらキビキビした動きと笑顔は素晴らしく、食材や盛り付けは時節や地域性を込められおいしく喜びであった。

（考察）

前段でも述べた内容に、地域の環境や人材のバランスをうまく取り込んでの地域づくりが肝心であり、特にリーダーの働きが大きく活動を左右することを学んだ。

事業は物を作るのみあらず、「人材発掘」、「人材育成」を加味してこそうまくいくもののようで、教育を含んだ事業計画が求められる。

以上

調査研究活動(H31.03.18～20)費用一覧表

番号	項　目	細 目	金 額
1	レンタカー利用料金		45,550
2	燃料	ガソリン	5,000
3	〃	〃	4,555
4	〃	〃	4,389
5	高速道路利用料		8,740
6	〃		2,610
7	〃		7,020
8	施設利用料金	5名	5,220
9	宿泊費	5名	32,300
10	マップ購入費	5名	6,000
11	宿泊、研修、資料代	5名	75,000
合計			196,384
個人割			39,277